

La Comédiathèque

ちょっとした殺人、 後腐れなし

Jean-Pierre
Martinez



comediatheque.net

著者および上演権

ジャン＝ピエール・マルティネスの戯曲は、無料でお読みいただき、ダウンロードすることができます。

ただし、プロ・アマチュアを問わず、公の場で上演する場合には、事前に著者の許可を得る必要があります。また、上演には所定の著作権使用料が発生する場合があります。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品の上演許可を希望される場合は、著者本人に直接お問い合わせください。

<https://jeanpierremartinez.net/en/contact-2/>

ちょっとした殺人、 後腐れなし

Jean-Pierre Martinez

ジャン＝ピエール・マルティネス

翻訳・翻案：著者

うっかり浮気から、うっかり殺人まで、
ほんの一步で越えられる。

難しいのは、その「動かぬ証拠」を跡形もなく消すこと……

登場人物

浩二

由美

真紀

© La Comédiathèque

第1幕

長野市内。センスはいいが、少し散らかったリビング。床に放り出されたスマートフォンが鳴っている。浩二が、明らかに動揺した様子で入ってくる。両手には血がついている。スマートフォンを見るが、手には取らない。

浩二 — くそっ……

スマートフォンの呼び出し音が止まる。浩二はハンカチを取り出し、それで慎重にスマートフォンをつかんでポケットに入れる。慌てて部屋を少し片づける。床に落ちていた血まみれのシャツを拾い上げ、青ざめて見つめる。

浩二 — うそだろ……

玄関のチャイムが鳴る。浩二はシャツをソファのクッションの下に押し込む。もう一度チャイム。

浩二 — 今行く！

浩二はいったん退場してドアを開け、妻の由美と一緒に戻ってくる。

由美 — ごめん、また鍵を忘れちゃった。今日は何もかもうまくいかないのよ。国選弁護士として、殺人罪に問われてる女を担当してたんだけど。笑うわよ。DIY好きの女で、夫を電動ノコギリで三つに切っちゃったの。（浩二が聞いていないことに気づいて、言葉を止める。）ちょっと……どうしたの？ まだ新しい芝居のアイデアで行き詰まってるの？

浩二 — いや。でも問題はそれじゃない……

由美 — 怖くなってきた。何があったの？ まさか、お義母さんが夕飯を食べに来るとか？

浩二 — いやいや、それは大丈夫……

浩二はソファに腰を下ろす。

由美 — じゃあ、そこまで深刻じゃないわね。ところで、何食べる？ 今日のはあんまり料理する気になれなくて……ピザでも頼んで、テレビ見ながら食べない？

浩二 — うん……いや……今はあんまり、そういう気分じゃない。

由美 — ピザを食べるのに気分まで必要だとは知らなかった。（隣に座ってキスする。）今すぐこのリビングの床で、激しく抱いてって言ってるわけでもないのよ。（反応の薄さを見て。）すごい情熱ね……とりあえず二枚頼むわ。ピザなら冷めても温め直せるし……

浩二 — 死体はそうはいかない。

由美は、その不気味な一言に驚いて浩二を見る。

由美 — まあいいわ……届くまでに、何があったか話して。私が全力であなたの生きる気力を取り戻してあげるから……（スマートフォンを取り出し、番号を押し始める。）薄いのと厚いの、どっち？

浩二 — 何が？

由美 — ピザの生地よ！ 薄いクリスピー？ それともふっくらしたの？

浩二 — どっちでも……

浩二は立ち上がり、部屋の中を行ったり来たりする。

由美 — じゃあ、いつも通り一枚ずつね……（電話に向かって。）はい、宅配をお願いします。Mサイズを二枚。マルゲリータとシーフードで。住所は長野市桜ヶ丘9-3です……片方はクリスピー、もう片方はパン生地で。はい、お願いします……（スマートフォンをしまう。）三十分くらいだって。ほら、こっちに座って。私が面倒見てあげるから……（浩二の場所を空けようとクッションを動かし、下からはみ出している血まみれのシャツに気づいて引っぱり出す。）何これ！ ここで何があったの？（浩二の手の血に気づく。）けがしたの？

浩二 — いや、これは……俺のシャツじゃないし、俺の血でもない……

由美 — じゃあ、誰の血？

浩二 — 由美、聞いてくれ。俺……人を殺したみたいなんだ……

由美 — みたい？ 何言ってるの？

浩二 — いや……みたいじゃない……間違いなく殺した……

由美 — ちょっと、浩二。そんな簡単に人を殺したりしないでしょ。私を見てよ。お義母さんを殺したいと思ったことなんて何度もあるけど、まだ殺してない。どうしてだと思う？

浩二 — さあ……

由美 — 犯罪者じゃないからよ！ 衝動だけで動かない。ちゃんと考える。得るものと失うものを天秤にかける。それで思うの。お義母さんの首を絞める一瞬の快感のために、刑務所で二十年は割に合わないって。

浩二 — 男のほうが、衝動を抑えるのが苦手なのかもな。

由美 — 浩二、私は裁判所で毎日のように犯罪者を見てるのよ。信じて。あなた、犯罪者役には全然見えないから……

浩二 — 俺もそう思った……ついさっきまでは。

由美 — 新しい芝居のアイデアでしょ！

浩二 — え？

由美 — 仕事から帰ってきた妻に、夫が「君の愛人を殺した」って告白する話。私で試してるのね？

浩二 — くそっ、由美！ 本当に人を殺したんだ。どう言えば信じるんだよ？

由美 — 殺人犯だって名乗れば、それで済むわけじゃないの。証拠を見せてもらわないと。

浩二 — 証拠……？

由美 — やってもしない犯罪を、自分がやったって言い張る人がどれだけいると思う？ 先週なんて、神父を殺した容疑でボーイスカウトの少年を弁護したの。笑うわよ。ほかにもカブスカウトが五、六人、「自分が殺した」って自慢してたんだから。裁判官に、本当に犯人なのは私の依頼人ですって納得させるのに苦労したわ。

浩二 — で……どうやって納得させた？

由美 — 簡単よ。神父の遺体を、どの木の下に埋めたか知ってたのはその子だけだった。

浩二 — それで？

由美 — それで……死体はどこ？

浩二 — すぐ隣。キッチンにある。

由美は、ようやく事態の深刻さに気づいたようだ。

由美 — キッチン？ 冗談でしょ……

浩二 — 見に行く？

由美はキッチンのほうを見る。ためらった末、やめる。

由美 — でも……何があったの？ そもそも、誰なの？

浩二 — 健司……

由美 — 健司？

浩二 — 健司だ。

由美 — うそ……健司だけは……

浩二 — ほかの誰かならよかったのか？

由美 — ねえ、浩二……嘘だって言って……

浩二 — 俺だってそう言いたいよ……残念だけど……

由美 — 冗談なんでしょ？

浩二 — 君が持ってるのは、あいつのシャツだ。見てみるよ……カフリンクスにイニシャルが入ってる。

由美は、信じられないという顔でカフリンクスを見る。

由美 — K・S……

浩二 — 佐藤健司。それに、結婚式でもないのにカフリンクスなんか付ける知り合い、あいつくらいだろ。

由美 — でも、浩二……どうして？

浩二 — 事故だった……

由美 — 事故？ つまり……家庭内事故ってこと？

浩二 — まあ、そう呼べなくもない……

由美 — ちゃんと説明して！ 庭の生け垣を刈ってて、すぐ後ろで立ち小便してた健司に気づかずに……頸動脈を切っちゃった、とか？ そういうことなら心配いらぬ。犯罪じゃないわ。腕のいい弁護士がいれば……

浩二 — 残念ながら、そういう話じゃない……

由美 — じゃあ、何があったの？

浩二 — どちらかと言えば……過失致死だ。

由美 — どういう意味で「過失」なの？

浩二 — 話し合いをした。

由美 — 話し合い？ 口論ってこと？

浩二 — まあ……口論と言えば口論だな……

由美 — かなり激しい口論ね……

浩二 — 殺すくらいにはな。でも、もう取り調べを受けてる気分だよ。

由美 — ごめん。職業病ね。

浩二 — とにかく、俺があいつを殺したのは確かだ。

由美は崩れ落ちるようにうなだれる。

由美 — 全部、私のせいだわ……

浩二 — 何だって？

由美 — 直接ってわけじゃないけど……

浩二 — どうして君のせいなんだ？

由美 — あなたを見捨てたりしない、浩二。痴情のもつれなら、情状酌量の余地は十分あるわ。

浩二 — 痴情のもつれ？ 俺と健司が？

由美 — 私が健司と寝たから、殺したんでしょ？

浩二（呆然として） — 君……健司と寝たのか？

気まずい沈黙。

由美 — それで殺したんじゃないの？

浩二 — 君があいつと寝たなんて知らなかった！

由美 — ずいぶん前のことよ……

浩二 — どれくらい前？

由美 — よく覚えてない……半年くらい……

浩二 — それを「ずいぶん前」って言うのか……そのうち時効だとでも言い出すんじゃないだろうな？

由美 — あれは……事故だったの。

浩二 — なるほど……家庭内事故か？

由美 — 浮気を続けてたわけじゃないの、浩二……一度だけ。本当に愛してたわけでもないし……

浩二 — それは安心したよ……好きでもない男と寝られるって分かって。

由美 — 男たちじゃない！ 健司だけよ、本当に。ちょっとした勘違いだったの！ 健司よ？ 私と健司なんて、想像できる？

浩二 — 俺の親友だぞ。

由美 — あなたが殺した親友でしょ……

浩二 — で、どうしてそんなことになった？

由美 — それが……勘違いだったの。

浩二 — なるほど……つまり、過失による不倫ってわけか……

由美 — その通り！

浩二 — こんなひどい言い訳、聞いたことないぞ。それが弁護方針か？

由美 — 立場を入れ替えないでくれる？ 犯罪を犯したのはあなた。私じゃない。警察に説明しなきゃいけないのは、あなたよ。

浩二 — 警察に俺を突き出すつもりなのか？

由美 — ほかにどうしろっていうの？

浩二 — 俺も、君が帰ってくるまではそうするつもりだった。でも健司が君の愛人だったと分かった今、誰も過失致死なんか信じてくれない！

由美 — 今度は私のせい？ それに、愛人なんかじゃない。一度寝ただけよ！

浩二 — どっちにしても復讐だと思われる。計画的だったって。無期懲役だ！

由美 — ちゃんと説明すれば……

浩二 — 「過失による不倫」のことか？

由美 — ちょっと！ 私は誰も殺してないんだからね！

間。

浩二 — じゃあ、どうする？

由美 — 「どうする」って、誰が？

浩二 — 俺を見捨てないよな？ 俺の親友と浮気して、その俺がそいつを殺したら、今度
は知らん顔か？

由美 — あなたが健司を殺した時点では、私が彼と寝たことを知らなかったでしょ！

浩二 — 言葉尻をとらえるなよ。

由美 — それより、本当よ。そもそも、どうして健司を殺したの？

浩二 — くだらない話だ。

由美 — 聞かせて。

浩二 — つまり……あいつが、俺の前作を全然面白くなかったって言ったんだ。

由美 — 前作？ 『電子レンジ』？

浩二 — ああ、まあ……最高傑作じゃなかったかもしれない。

由美 — 『電子レンジ』なのに、客席は見事に冷え切ってたものね。

浩二 — わざわざ思い出させてくれてありがとう……

由美 — タイトルを変えたほうがいいって言ったでしょ……それで殺したの？ 「面白くなかった」って言われたから？ どうせみんな酷評してたのに？

浩二 — 長年くすぶってた対抗心に火がついたんだろうな。俺たちはずっと張り合ってた。女のことでも。高校の頃から……

由美 — それで？

浩二 — つかみ合いになった。あいつが滑って、テーブルの角にこめかみをぶつけた。

由美 — シャツの血を見たら、刃物で刺したのかと思った。

真紀 — 下にあいつのスクーターがあった気がしたんだけど。まあ、スクーターなんてどれも似てるしね。

由美 — そう……そうね……

真紀 — 浩二は？

由美 — いる、いるけど……仕事中なの。新しい芝居を書いてて。ほら、書き始めるとあの人……

真紀 — 分かる……前の芝居があれだけコケたあとじゃ、なおさらね。何てタイトルだっけ？

由美 — 『電子レンジ』。

真紀 — 『電子レンジ』なのに、客席が冷え切るなんてね。

由美 — その話をしに来たわけじゃないんでしょ……

真紀 — 邪魔して本当にごめん。今じゃないほうがいいのは分かってるんだけど、大事なことなの。

由美 — 何言ってるの！ 全然邪魔じゃない。こういう時に頼れないなら友達じゃないでしょ。何か飲む？

真紀 — ううん、ありがとう。大丈夫。

由美 — よかった……（真紀が少し不思議そうに見る。）いや、そうじゃなくて……ほら、座って。（真紀が、血まみれのシャツを隠したクッションのそばに座ろうとする。）あ……そこじゃなくて、こっちにしない？

由美は真紀に、少し座り心地の悪そうなスツールかオットマンを示す。

真紀（座りながら） — うん……

由美 — ほら、このソファって……座るとすぐ眠くなるでしょ。私もちょっと疲れてるし……あなたの話をちゃんと集中して聞きたいの。（同じような椅子を引き寄せて座る。）それで、そんなに大事な話って何？

真紀 — それが……信じられないと思うけど……健司が浮気してるって分かったの。

由美 — えっ？ 知らなかったの？

真紀 — うん……知らなかった。何？ 由美は知ってたの？

由美 — まさか！ そうじゃなくて……相手は分かってるの？

真紀 — はっきりとは。

由美 — よかった、よかった……

真紀 — 何が「よかった」の？

由美 — いや、つまり……相手が誰かまで分かったら、もっとつらいんじゃない？

真紀 — そうかな……

由美 — それに、誰だっていいじゃない。大事なのは、浮気してたってことでしょ？

真紀 — まあ……そうね。一番最悪なのは、相手が知ってる人だった場合よ。

由美 — そうよね……

真紀 — 想像してみて。夫の浮気相手が、自分の親友だったって知ったら？

由美 — 何言ってるのよ……

真紀 — 心配しないで。私は由美にそんなこと絶対しないから。

由美 — ありがとう。

真紀 — とにかく、もう終わり。離婚する。

由美 — そんなに急がなくても……決めるの早すぎない？　もしかしたら事故だったかもしれないし……

真紀 — 事故？　どういう事故よ？　ぼんやりしてて、うっかり誰かに突っ込んだりしたとか？　あとで事故処理して、保険会社が払ってくれるの？

由美 — いや、もちろんそういう意味じゃ……

真紀 — それで夜、家に帰って妻に言うの。「あ、言い忘れてた。ちょっと事故って隣の奥さんに突っ込んだ。でも安心して、向こうが悪いから」って？

由美 — 隣の奥さんに突っ込んだの？

真紀 — 違うわよ！　たとえ話！　由美、大丈夫？　この話、私よりあなたのほうがショック受けてない？

由美 — あなたが心配なのよ。二人って、本当に理想の夫婦みたいだったから……健司と真紀って言えば……

真紀 — 浩二と由美みたいに？

由美 — だから、二人が別れるなんて考えると……

真紀 — ほらね。永遠なんてないのよ。

由美 — ロミオとジュリエットだって、結末は最悪だったしね。

真紀 — とにかく、あのクズと同じ屋根の下ではもう二度と寝ない。

由美 — 分かるわ、もちろん……

真紀 — 離婚のこと、由美に頼っていいよね？

由美 — 私に？ 　　どうかな……二人とも知ってるし、ちょっとやりにくいかも。

真紀 — 冗談でしょ？ 私の友達是由美よ！ 健司はどっちかっていうと浩二の友達。私たち、あの二人に会うずっと前から友達だったでしょ？

由美 — そうね……

真紀 — 男なんてみんな豚よ……あ、浩二のことじゃないからね、もちろん。

由美 — もちろん。

真紀 — まあ、あの二人も似た者同士だけどね……

由美 — そこまで言わないでよ……浩二は本当に……

真紀 — 見てなさい。離婚で思い知らせてやる。由美、法廷じゃ「殺し屋」って呼ばれてるんでしょ？

由美 — 何ですって？

真紀 — 弁護士としてよ！ 相手を徹底的に叩きのめすって評判じゃない。

由美 — そうなの？

真紀 — 麻里が言ってた。ほら、離婚を担当したでしょ。

由美 — ああ……

真紀 — そうよ！ 長野駅前で大きな歯科医院をやってる男と結婚してた人。診察台で患者に開けさせてたのは、口だけじゃなかったらしいじゃない……とにかく、由美が旦那を丸裸にしたって聞いたわ。

由美 — 大げさよ……弁護士の仕事は相手を破滅させることじゃない。離婚は、二人で築こうとした人生がうまくいかなかったってことなんだから。私たちはまず、その別れを少しでも苦しくないものにするために……

真紀 — 謙遜しないで。「殺し屋」なのは知ってる。言っとくけど、健司からは最後の一滴まで搾り取ってやる。

浩二が、血のついたエプロン姿で戻ってくる。

浩二 — やあ。

真紀 — 新しい大ヒット作を書いてるんじゃないの？

浩二 — 料理もしながらね……

真紀 — へえ……

浩二 — ほら、芝居を書くのと料理って似てるんだよ。まず材料がよくて、レシピがよくて。塩を少々、スパイスを少々。あとはじっくり煮込めば……

真紀 — そう……料理まで得意だったとは知らなかった。で、得意料理は？

浩二 — イノシシのパテ。

由美 — あの人の有名な秘密のレシピ。作ってる時は、誰もキッチンに入っちゃいけないの……

浩二 — で、真紀は大丈夫？

由美 — 健司が私たちのもとを去って……じゃなくて、真紀が……健司と別れることにしたの。

浩二 — えっ？

真紀 — あのクズが浮気してるって分かったの。浩二、何か知ってた？

浩二 — 俺が？ 何も知らないよ！ どうして俺が知ってるんだ？

真紀 — 男同士のかばい合いてあるでしょ。友達のアリバイを作ったり。時には部屋まで貸したり……

浩二 — 真紀、完全に誤解だよ……俺たち友達じゃないか。どうしてそんな……

真紀 — ごめん。神経が参ってて……自分でも何言ってるか分からなくなってる。

由美 — 少しここにいなさい。落ち着いたら家に帰って寝て、明日もう一度話しましょう。頭が冷えてから。ね？

真紀 — 家？ 絶対いやだって言ったでしょ！ それで、二人ともいる今のうちにお願いがあるんだけど……

浩二 — 何……？

真紀 — 今夜、ここに泊めてもらってもいい？

由美 — それは、その……

真紀 — 明日になったら何とかする……母のところに行ってもいいし。でも今夜は……（泣き出す。）誰かにそばにいてほしいの……今、頼れるのは二人しかいないから……

由美は真紀に近づき、慰める。

由美 — もちろんよ……

真紀 — 二人なら頼れると思ってた……今すぐ母に話す気にはなれないの。母は健司のこと嫌ってたし、「女好きだからやめなさい」ってずっと言ってた。残念ながら正しかった。でも今は、母の説教なんか聞きたくない。二人なら……

由美 — もちろん。私たちはここにいる。ね、浩二？

真紀 — 本当の友達ね。すごくうれしい……

真紀は由美の胸に飛び込む。

由美 — 心配しないで。きっと何とかなる……たぶん……

浩二 — 女同士でゆっくり話して。俺はパテを仕上げてくる……

由美は、ぞっとした顔で浩二を見送る。

真紀 — 今ここに健司がいたら、私、何するか分からない。本当に……私だって、あの豚をミンチにしてやりたいくらい。

由美 — そんなこと言わないの……

真紀（涙を拭きながら） — こんなことに巻き込んで、本当にごめんね。

由美 — 少し落ち着いた？

真紀 — ちょっと……今度は何か飲みたい。

由美 — えっと……何がいい？

真紀 — 水でいいよ。水道の水で十分。気を遣わないで。キッチンで自分で入れてくるから。

由美 — ダメ！

真紀（驚いて） — あ、そうだった……イノシシのパテね。

由美 — 今のあなたには、もっと強いものが必要よ。絶対。

真紀 — でも……

由美 — 私も付き合う。私も一杯やらないと無理。

真紀 — 由美も？

由美は棚からボトルとグラスを二つ取り出し、酒を注ぐ。グラスを掲げる。

由美 — ほら、くじけてなんかいられないでしょ？（動揺しながら。）きっと……何とかなる……

由美が突然泣き出す。今度真紀が由美に近づいて慰める。

真紀 — 親友だとは思ってたけど……ここまで私のことで泣いてくれるとは思わなかった……

由美は気を取り直す。

由美 — ほら、乾杯しよう。健司が戻ってくるわけじゃないけど、少しは気が楽になる。

由美は一気に飲み干す。真紀もそれにならう。

真紀 — うわ……死人でも目を覚ましそう……

由美 — そうならいいのに……

真紀 — これ、何？

由美 — 自家製のジャガイモの蒸留酒。

真紀 — へえ……何ていうか……味はあんまりしないね？

由美 — しないわね。

真紀 — でも、喉から胸までカッとくる……

由美 — そうね……

沈黙。

真紀 — 私、どうしてこんなにバカだったんだろ……

由美 — え？

真紀 — 健司のこと！ 全然気づかなかった……

由美 — もしかしたら戻ってくるかも……ただの悪い夢よ。きっとみんな目を覚ます。

真紀 — 残念だけど、そうは思えない……さっき、相手が誰か分かってるかって聞いたでしょ……

由美 — 誰？

真紀 — 健司が浮気した相手！

由美 — それで？

真紀 — 一人だけならまだよかったんだけど……

由美 — ということ？

真紀 — 仕事用だって言ってたパソコンのパスワードを突き止めて開いてみたら、健司が出会い系サイトに登録してるのを見つけたの……

由美 — 出会い系……？

真紀 — 「今夜だけ.com」……健司が浮気してる相手、一人じゃないの、由美。何百人もいる！

由美 — まさか。

真紀 — もう完全なセックス狂よ。年上も年下も、太ってても痩せてても、髪が明るくても暗くても……選り好みなし。動くものなら何でもって感じ。

由美 — そんなに……？

真紀 — 私も今になって知ったの。それに、あの女たちとのやり取りがまた、下の話ばかりで……

由美 — えっ、下の写真まで送り合ってるの？

真紀 — 写真じゃないって。下ネタだらけのチャット。文章よ。もう、とにかく生々しいの。

由美 — そ、そうよね。さすがに限度ってものがあるし。

真紀 — でも健司、その限度をとくに越えてるわよ……

由美 — そんなに？

真紀 — あの会話を読ませたいくらい。本当に、今まで知らなかった。だって私との夜なんて、もうマンネリそのものだったし……

由美 — うちもそう……あ、私と浩二のことよ。

真紀 — 気をつけなよ。知ってるつもりでも、ある日突然……

電動ナイフ、ヘッジトリマー、あるいはチェーンソーのような音が聞こえる。

由美 — 生け垣を刈ってるのよ……

真紀 — イノシシのパテを作りながら？

音がさらに大きくなる。

由美 — 何してるのか見てきたほうがいいかも……真紀は客間で休んでくれる？

真紀 — うん。気を遣わないで、場所は分かるから……本当にありがとう。

真紀が退場する。浩二が戻ってくる。

浩二 — 真紀はどこへ行った？

由美 — 首を絞めて、ひとまず浴槽に入れておいた。邪魔な証人は全部消したほうがいいでしょ。

浩二 — 本当にやったのか？

由美 — やるわけないでしょ！ それよりあなた。何してるの？ あの音は何？

浩二 — キッチンの真ん中に、あいつを置きっぱなしにはできなかった。

由美 — それで？

浩二 — 冷凍庫に入れた。死体をどうするか決めるまで。

由美 — その合間に、キッチンで生け垣を刈ってたわけ？

浩二 — いや、その……一つのままだと入らなくて……

由美 — うそでしょ……信じられない……どうしてこんなことになったの、浩二？ 今すぐ警察に電話する。

由美はスマートフォンを取り出す。

浩二 — 俺を刑務所に送りたいのか？

由美 — 犯罪者が行くところでしょ？

浩二 — 事故だったって言うてるだろ。

由美は思い直す。

由美 — そもそも、本当に死んでるの？

浩二 — 「ヘッジトリマーで三つに切る前に、本当に死んでたのか」って意味？ 今となっては、もう間違いなく死んでると思うけど……

由美 — 自分が結婚した男の口から、そんな言葉を聞く日が来るなんて思わなかった。

浩二 — 結婚式で言うだろ……健やかな時も、病める時も……先に考えておくべきだったな。

由美 — 何を？

浩二 — 少なくとも、健司と浮気する前に……

由美 — あなた、どうかしてる、浩二。助けが必要よ。自分で言ったでしょ、過失致死だって。一時的に正常な判断力を失っていたって主張しましょう。

由美は番号を押す。

浩二 — やめる……

由美 — これしかないの。信じて。

浩二 — 君も共犯だと思われるぞ。

由美 — どうして？

浩二 — 妻がここにいるのに、何も言っていない。

由美 — でも、私があなただを手伝う理由なんてないでしょ？

浩二 — あいつは君のことも裏切ってたからだ！ 君も復讐したかった。

由美 — 私のことも裏切ってたって、どういう意味？

浩二 — さっき二人の話を聞いた。あの出会い系のアカウントなら、俺も知ってる……

由美 — 知ってたの？

浩二 — 男って、セックスの話になるとやたら自慢したがるんだよ……女房を裏切るのも、あとで仲間に「何人落とした」って自慢するためなんじゃないかと思うくらいだ。狩りの獲物みたいにな……

由美 — それで私には何も言わなかったの？

浩二 — 知って何になった？ 真紀との間で気まずい立場になるだけだろ……

由美 — なるほど。私を守るためだったってわけね。どっちにしても、私には健司を殺す理由なんてない。

浩二 — 本当に？

由美 — どうして私が？

浩二 — 嫉妬だよ。真紀と同じ。

由美 — 何言ってるの……

浩二 — 自分だけだと思ってた。大勢いる女の一人にすぎないって知って、許せなかった。それで俺が殺したいと言った時、君も手を貸した。自分も復讐したかったから。

由美 — 本当にどうかしてる、浩二！

浩二 — どうかしてるのは二人ともだ。似た者夫婦ってやつさ。新聞の見出しが目につく。「悪魔の夫婦、親友の遺体を解体しキッチンの冷凍庫へ。その隣室で未亡人と平然と夕食」……

由美 — 警察にそんな話をするつもり？ 私まで道連れにするために？ 最低！

浩二 — 俺がそう話すんじゃない！ 裁判官がそう考えるってことだ。俺が「全部自分一人でやった」って言っても、君をかばってると思われる。

由美は動揺する。

由美 — そう思う……？

浩二 — どっちにしても、弁護士としてのキャリアは終わりだ。愛人をヘッジトリマーで切り刻む弁護士に、誰が離婚を頼む？

由美 — 残念だけど……その通りね。

浩二 — それに裁判官の前で、「うっかり夫以外の男と寝ました」って説明できるのか？

由美 — 本当にそうだったのよ！

浩二 — 過失による不倫？ じゃあ俺を納得させてみるよ。話してみる。

由美 — あなたが『電子レンジ』の初日で東京に行ってた週末よ。私は金沢で裁判があつて行くはずだったんだけど、結局延期になったの。

浩二 — あの大惨事を見たくなくて逃げたって言えば？

由美 — とにかく、二人とも留守のはずだった。この家は空っぽのはずだったの。

浩二 — 健司が、女を連れ込むから鍵を貸してくれって言ってきた。じゃあ相手は君だったのか？

由美 — 違うってば！ 私は夜中に予定外に帰ってきたの。あなたが健司に家を貸してたなんて知らなかった……しかも、女と寝るために私たちのベッドまで！

浩二 — 二人で寝られるベッドはあれしかないんだよ……それで？

由美 — 帰って、そのままベッドに入ったの。

浩二 — 健司と……

由美 — 誰か寝てるのは分かった。でもあなたかと思ったの！ 初日が終わったあと、そのまま夜中に帰ってきたのかと。どうせ大コケすると思ってたから、不思議にも思わなかった……

浩二 — ありがとう……

由美 — 起こさないように静かに入ったの。

浩二 — でも結局、隣で寝てた男は目を覚ました。

由美 — 健司が連れ込んだ女は、たぶん夜中に帰ったのね。それで健司は、もう一回その気になったらしい。

浩二 — それで君が交代要員になったわけか。ハーフタイムから途中出場した、と……

由美 — あの女と間違えたんだと思う。次の朝になるまで、ベッドにいたのがあなたじゃないって気づかなかった。まあ、ちょっと変だとは思ったけど。

浩二 — 何が？ いつもよりよかったとか？

由美 — そんなこと言ってない……ただ、いつもと違ってたっていうか……それに、どうしてあなたが私のことを「リナ69」って呼びたがるのか分からなかった。

浩二 — あいつ、ずいぶん張り切ったんだな？

由美 — まあ……あんなに……いろんなことされるの、しばらくなかったから。

浩二 — おまけに俺をからかうのかよ……

真紀が戻ってくる。

真紀 — ごめん……歯ブラシ貸してくれる？ 勢いで出てきちゃって、何も持ってなくて……

浩二 — とにかく今夜は、ベッドを間違えないようにな……何があるか分からないから。

真紀 — え……うん……

浩二 — じゃあ、俺は失礼するよ……二人には話すことが山ほどありそうだし……経験談を交換したり……

浩二は退場する。

真紀 — 今の、どういう意味？

由美 — 分からない……いや、分かる……

真紀 — 何？

由美 — 私が浮気したって責めてるの。

真紀 — で……本当なの？

由美 — 不倫だったけど……過失だったの。

真紀 — 過失による不倫……？ 冗談でしょ？

由美 — 本当。

真紀 — へえ……

由美 — ある日、家に帰ったらベッドに男がいたの。次の朝になるまで、それが夫じゃないって気づかなかった……

真紀 — 本気で言ってる？

由美 — 本気。

真紀 — そんな話、誰が信じるのよ、由美？ まさか旦那にそう説明したんじゃないでしょうね……

由美 — そうよね……完全にあり得ない話よね。

真紀 — でも、ちょっとうらやましい。考えてみて。罪悪感なしで楽しめるなんて。

由美 — しかも罰もなし……

真紀 — で……よかったの？

由美 — まあ……正直に言えば……うん、かなりよかった。

真紀 — 知らずに浮気したなら、本当の浮気じゃないよね……？（二人は神経質に笑い出す。）でも健司がそんなバカみたいな話を私にしたら、私のことを相当バカだと思ってるってことよね……

由美 — もちろん。でも……夫婦なら、許すことも必要じゃない？

真紀 — 許す？ 私、本当にあいつを殺せそう。

由美 — もののたとえよね？

真紀 — 由美は、誰かを殺したいって思ったことない？

由美 — まあ……

真紀 — 例えば浩二が浮気したら、殺せる？

由美 — どうして？ 何か知ってるの？

真紀 — ううん、何も……

由美 — じゃあ……真紀は？ 健司に浮気したこと、一度もないの？

真紀 — ない……まあ……何をもって「浮気」っていうかによるけど。

由美 — へえ？

真紀 — つまり、厳密に言えば……

由美 — 分かった……口でするだけなら浮気じゃない、とか。そういう話？

浩二が戻ってくる。

浩二 — さて……そろそろ腹を満たすか。

由美 — 腹を割る気になった？ 全部白状する覚悟ができたの？

浩二 — 割るんじゃないくて満たすんだよ。夕飯の話……

真紀 — ああ、そうだった……イノシシのパテ……

由美 — ちょっと顔を洗ってくる……

由美が退場する。気まずい沈黙。

真紀 — 由美には言っていないの？

浩二 — 何を？

真紀 — 去年の年越しに、私たちがちょっと羽目を外したこと。

浩二 — 言っていないよ！ どうして？

真紀 — 何となく……由美、様子が変わるから……

浩二 — それとは関係ない。絶対。

真紀 — だって、あれ以来一度も話してないでしょ……私もちょっと酔ってた。浩二も……でも、意味なんてなかったよね？ ただの……ちょっとした事故。

浩二 — もうやめてくれ……君まで「事故」とか言い出すのか……

真紀 — ごめん。蒸し返すんじゃないかった……

浩二 — もう忘れたよ……

由美が、少し動揺した様子で戻ってくる。

由美 — じゃあ、そのイノシシ、食べる？

玄関のチャイムが鳴る。

浩二 — 今度は誰だ……？

由美 — 警察？

二人の妙な様子を不審に思い、真紀が心配そうな視線を向ける。

浩二 — 俺が出る……五分たって戻らなかったら、俺の弁護士を呼んでくれ……

由美は真紀を安心させるように、意味ありげな目配せをする。

由美 — 私たちのちょっとした遊びなの。

真紀 — そう……

由美 — イノシシ、好き？

真紀 — まあ……うん……

浩二が箱を持って戻ってくる。

浩二 — ピザだった。

由美 — あ、そうだった。すっかり忘れてた。

真紀 — パテがあるのに、ピザまで頼んだの？

気まずい沈黙。

暗転。

第2幕

真紀 — パテ、おいしかったよ、浩二。本当に。

浩二 — ありがとう……散弾の粒で歯を折りかけたのは悪かった。気をつけても、一つ二つ残ることがあるんだ。

真紀 — 犯罪の痕跡を全部消すのって難しいのね？ でも浩二が狩りをするなんて知らなかった。

由美 — 変ね。私も知らなかったわ……

浩二 — 今どきは、あまり自慢して言うことでもないからね。

真紀 — じゃあ、あのかわいそうなイノシシ、本当に浩二が仕留めたの？

浩二 — まあ、始めたばかりだから……まだあんまり上手じゃない。

真紀 — うん、それは知ってる……

浩二 — 射撃の腕の話だよ。狩りの……

真紀 — でもイノシシってかなり大きいでしょ。そんなに射撃の名人じゃなくても当たりそうじゃない？

浩二 — 実は、どちらかというと……事故だった。

真紀 — 事故？ また？

浩二 — 健司と狩りに行って、何も獲れずに帰る途中だった。車で走ってたら、イノシシが突然、目の前に飛び出してきたんだ。

真紀 — 生きるのが嫌になったイノシシだったのかも。イノシシ人生に絶望して……

浩二 — たぶんね……

真紀 — それにしても浩二って、ずいぶん外でするのが好きなのね……

浩二 — え？

真紀 — 外で、って意味よ。狩りにゴルフに……

由美 — ゴルフもするの？

浩二 — ああ、最近また少し始めた……

真紀 — で……健司と本当にゴルフしてたの？ それとも愛人と会うためのアリバイを作ってあげてただけ？

浩二 — いや、本当に一緒にやってたよ。健司はほんと遊びが好きで……いや、ゴルフが好きで、腕もいいんだ。

真紀 — そうみたいね。軽井沢に、林の中のきれいな18ホールがあるって言ってた。ホテルも併設されてるらしいよ。

由美 — 素敵ね……今度、私も連れてってよ、浩二。ゴルフ、やってみたいわ。

真紀 — とにかく、イノシシのパテのレシピ教えてね。あ、そうだった。ごめん……それも秘密なんだよね……

気まずい沈黙。

由美 — サラダ、もう少しいる？

真紀 — ありがとう。本当にもう何も入らない……

浩二 — 休みたかったら、遠慮しないで。

真紀 — こんなことがあったから、すぐ眠れるか分からないけど……でも、こういう時に頼れる友達がいるって、ありがたい。

由美 — ここは自分の家だと思って、真紀……

浩二 — デザートは？

由美 — 冷凍庫にアイスがあるわよ……

真紀 — ありがとう、いらない……ちょっと手を洗ってきてもいい？

真紀は立ち上がる。

浩二 — 洗面所でお願い。キッチンはやっと散らかってて……

真紀が退場する。浩二はパテをもう一度自分の皿に取る。

由美 — ずいぶん平気そうね……少なくとも食欲は落ちてないみたい。

浩二 — 飢え死にしたら何か解決するのか？

由美 — どうして自分が狩りをするなんて言ったの？

浩二 — 分からない……とっさに出たんだ……キッチンのをぞかせないためには、何か言わなきゃならなかったし。

由美 — それで、このパテは？ 本当は何？ 聞かないほうがいい？

浩二 — いやいや……これは本当だ。イノシシのパテだよ。

由美 — ゴルフの話もあとで聞かせてもらおうからね。あのゴルフ、かなり怪しいわ……

浩二 — 隠し事なんて何もないよ……

由美 — 死体以外はね……もう一度だけ聞く。これ、本当に冗談じゃないの？ もし冗談なら最低よ。隣の部屋には“未亡人”がいるのよ……

浩二 — 見たければ冷凍庫をのぞけばいい。ただし、きれいなものじゃないぞ。

由美 — 見たくない。何も知りたくない。

浩二 — 「知らなかった」で通すのは難しいと思うけどな……冷凍庫に隠した赤ん坊を、冷凍ハンバーグの間から見つけたって話じゃない。身長一九五センチの男が、六五センチずつ三つに分かれて入ってるんだぞ……

由美 — あなた、化け物よ……死体を隠したらどれくらいの罪になるか知ってる？ 人生で一番いい時期を刑務所で過ごさせたいの？

浩二 — もう同じ船に乗ってるんだ、由美。助けてくれ！

真紀が戻ってくる。

真紀 — 健司に電話する。

由美 — 今はやめたほうがいいと思うけど。

真紀 — 私が別れるって、本人にも言わなきゃ！

由美 — もう少し考えてからでもいいんじゃない？

真紀 — もう十分考えた。絶対に許さない。

浩二 — 話すのは明日でもいいんじゃないか？

真紀 — 今夜帰らなかったら、私がどこに行ったか心配する。警察に連絡するかもしれない。

由美 — ああ、それなら……連絡したほうがいいかも。

浩二 — 今のあいつの状態じゃ、警察に電話なんかしないと思うけど……

真紀 — 今の状態って？

浩二 — つまり……もう何か感づいてて、自分でも気まずいんじゃないかってこと。

由美 — いっそ家に帰ったら？ 明日になれば、また落ち着いて考えられるでしょ……

真紀 — あのクズと同じ屋根の下で、もう一晩だって眠れない。

由美 — 今、ちゃんと話せる状態？

真紀 — 大丈夫。家を売るとか、犬をどっちが引き取るとか、そんな相談を始めるわけじゃない。あとは私の弁護士に連絡しろって言うだけ。つまり、由美に。

浩二 — じゃあ、由美が離婚を担当するの？

由美 — 分からない……まあ……真紀に頼まれたから……

浩二 — そう……どうしても今電話するなら、一人にしようか？

由美 — 静かなところがいいなら、あっちの……

浩二 — キッチンだけはダメだ。

真紀 — 二人がいてくれたほうがいい。

□ ^ □ □ ♪ □ □ □ □ □ □ ♪ □ □ □ □ ♪ □ Q □ □ □ □

真紀 — 変ね。隣で鳴ってるみたい……

浩二 — 俺のスマホじゃないかな。

真紀 — じゃあ出ないの？

浩二 — ああ、出る出る……

浩二は、由美の不安そうな視線を受けながら退場する。

真紀 — ずっと鳴ってる……

由美 — そう……まあ、不思議じゃないわ。

真紀 — どうして？

由美 — あなたの名前が表示されて、何の電話か分かったら……出たくないのかも。

真紀 — もしもし……健司？ 全部知ってるから。何をって？ しらばっくれないでよ。そう、18ホールのゴルフもね。あのサイトでは何て名乗ってたっけ？ そう、「健司327」。同じような健司が多すぎて、327まで付けないと登録できなかったのね。最低！ それしか言えないの？ 情けない男。もう終わりよ、健司327。次に私に何か言いたければ、弁護士を通して。よく知ってるでしょ、由美よ。そう、由美！ 親友の浩二の奥さん。言葉も出ない？ じゃあね、このクズ！（スマートフォンをしまう。）ああ、言いたいこと言うとすっきりする……

由美は呆然としている。

由美 — 今の……誰？

真紀 — 誰って何？ あいつよ。ほかに誰がいるの？

由美 — 健司？ 何て言ってた？

真紀 — 大したことは。何を言えるっていうの？ でも変な声だった。アスピリン飲もうかな。頭痛がしてきた……洗面所で水もらっていい？

由美 — どうぞ。

真紀 — あのクズ……

真紀が退場する。浩二が戻ってくる。

浩二 — 大丈夫？ どうした？

由美 — よくも私をだましたわね！

浩二 — 何が？

由美 — 真紀よ。今、健司と電話で話した。

浩二 — あれ、俺だよ。

由美 — え？

浩二 — 健司のスマホ！ ポケットに入ってたから、そのまま俺が持ってたんだ……怪しまれないように、俺が出た。

由美 — うそ……だから真紀、「変な声だった」って言ってたのね。

浩二 — ドラマでやるみたいに、ハンカチ越しにしゃべった。

由美 —ほんと、どうかしてる……

浩二 — これでアリバイができた。真紀は今、健司と電話で話したんだから、一時間前にここで俺が殺したはずがない。

由美 — 警察が発信場所を調べなければね。それで、通話がうちのキッチンからだったと分かなければ。

浩二 — そこまで調べると思う？

由美 — 殺人事件なのよ。

沈黙。浩二は泣き出しそうなふりをする。

浩二 — どれだけ後悔してるか……一時間前に戻れたら……でも、もう無理だ……

由美 — 本当に、芝居をけなされたから殺したの？

間。

浩二 — いや……それだけじゃない……

由美 — じゃあ、どうして？

間。

浩二 — あいつが、君と寝たって白状した。

由美 — そう……だったら、どうして最初から言わなかったの？

浩二 — 君が自分から話すかどうか見たかった……

由美 — じゃあ健司が「ただの勘違いだった」って言っても、あなたは信じなかったのね。

浩二 — 健司は、自分にとっては勘違いだったなんて一言も言わなかった。そこが問題なんだ……

由美 — あのクズ……殺してやる！

浩二 — もう俺がやった……頼むから、死体を消すのを手伝ってくれ。俺を愛してるなら……愛してる？

由美 — もちろん愛してる。どうして疑うの？

浩二 — 信じるよ。

由美 — じゃあ私のことも信じて。健司と寝たのは、本当に間違いだったって。

浩二 — 努力するよ……簡単じゃないのは分かるだろ……

由美 — どうすれば、どれだけあなたを愛してるか証明できるんだろう……

浩二 — もう十分やってくれた。でも君の言う通り、俺は助からない。共犯で君まで刑務所に巻き込みたくない。警察に電話する。

由美 — 待って！

浩二 — 何？

由美 — あなたが何年も刑務所に入るなんて嫌。

浩二 — じゃあ、どうする？

由美 — 健司の死体を消すの、手伝う……

浩二 — どうやって？

由美 — 信じて。弁護士をしてると、依頼人はいろんな秘密を打ち明けるの。身長二メートル近い男の死体でも、一晩、苛性ソーダの液に浸ければ、浴槽の排水口から処理できる、なんて話も聞くわ。

浩二 — そうか……

由美 — でもその前に、まず彼女を何とかしないと。

浩二 — 彼女を「何とかする」？

由美 — ここから追い出すって意味よ！

浩二 — びっくりさせるなよ……

真紀が戻ってくる。

真紀 — 二人とも、何その顔。何かあった？

由美 — ううん、何も。

真紀 — 横になってみたんだけど、眠れなくて。

浩二 — 少し飲んで、落ち着く？

真紀 — 薬飲んじゃったから……お酒と混ぜないほうがいいよね？

由美 — ちょっと食後酒を飲むくらい、誰にも害はないわよ。

真紀 — 確かに、あのイノシシがちょっと胃にもたれてて……おいしかったけど、少し重いよね？

由美は三つのグラスに酒を注ぎ、そのうち一つにこっそり錠剤を落とす。

浩二 — またあの消毒用アルコールみたいなのを出したのか……

真紀 — ジャガイモの蒸留酒でしょ……

由美 — 信州の双岳村の名物なの。

真紀 — 双岳村？

浩二 — 由美のおじさんが住職なんだ。夜になると寺の蔵で、こっそり蒸留器を使って造ってる。

真紀は上の空で、二人の話を半分しか聞いていない。

真紀 — 健司、いったいどこで女たちと会ってたんだろう。

浩二 — ホテルならどこにでもあるだろ。

真紀 — あいつ、ものすごくケチだったから。ホテル代なんて払うかな。そもそも、あのサイトに登録したのだって、風俗にお金を払いたくなかったからだと思う。相手の写真を見る限り、選り好みなんて全然してなかったし……

由美 — どうも……

真紀は不思議そうに由美を見る。

浩二 — でも、どうして過去形で話すんだ？

真紀 — え？

由美 — 「ものすごくケチだった」って言ったでしょ。

真紀 — 私の中では、もう死んだ人だから。

由美 — そんなこと言わないの……

真紀 — それとも、友達が部屋を貸してたとか……こういう時、男同士って妙に助け合うから。浩二のことを言ってるんじゃないよ、もちろん……

浩二は真紀のグラスに酒を足す。

浩二 — もう自分を苦しめるのはやめろよ……ほら、もう一杯。

真紀 — 何だろう……さっきまで全然眠れなかったのに、急にものすごく眠くなってきた……もう寝ようかな……

□ ♪ □ □ □ ♪ □ □ □ ♪ □ □ □

浩二 — 薬が効いたみたいだな……

由美 — 効いたのは、私がグラスに足した睡眠薬のほうよ。

浩二 — 本当に入れたのか？

由美 — これで安心して死体を片づけられる。

浩二 — 真紀の？

由美 — 健司のよ！ 手伝って。真紀を客間に運ぶの。明日の朝、目を覚ました時には正式に未亡人よ。

浩二 — 離婚の面倒まで省いてやったわけだ。

由美 — 結局、親切なことしてるのよね。

二人は真紀の足を持って舞台袖へ引きずり、すぐ戻ってくる。

浩二 — 健司のほうは、どうする？

由美 — アルカリで溶かすのは時間がかかりそうね。

浩二 — 明日の朝、真紀が風呂に入りたいって言い出したら困るし……

由美 — そうね……

浩二 — 健司を三つのゴミ袋に分けて、山にでも連れていこう……

由美 — 動物園は？ 映画で見たことがある。猛獣の檻に投げ込めば、跡形もなし。

浩二 — 茶臼山動物園の入口を、ゴミ袋三つ持って通れると思う？

由美 — 夜にフェンスを越えれば？

浩二 — 茶臼山の林で十分だよ。物置にスコップがある。

由美 — それで……健司のこと、手伝おうか？

浩二 — 大仕事はもう済んだ。俺がやるよ。汚れるから……

由美 — そう……

浩二は退場する。

真紀 — ううん……寝てたけど……スマホを忘れてて……

浩二 — ゴミを出しに行くところだったんだ……

真紀 — もう一度寝る。私のことは気にしないで……

真紀は明らかに怯えながら退場する。

浩二 — 何か気づいたと思う？

由美 — 彼女も始末したほうがいいんじゃない？

浩二 — 俺のためなら人まで殺す気か？ ちょっと怖くなるな……

由美（高揚して） — エディット・ピアフの『愛の讃歌』、知ってる？（歌う。）あなたが望むなら、国だって捨てる、友だちだって捨てる……

浩二（不安そうに） — 由美、実は言わなきゃならないことがある……

由美 — まさか、また誰か殺したんじゃないでしょうね！

浩二 — いや、今度は逆で……いや、殺したと言えは殺したんだけど……

由美 — かわいそうな健司……それでも友達だったもの。最後に顔を見てお別れしたい。頭はどの袋？

浩二 — 俺なら、やめとくけど……

由美 — ちょっと話し合ったほうがよさそうね。そう思わない……？

浩二 — 分かった。ゴミ袋の中身は健司じゃない。

由美 — 健司じゃないってどういうこと？ ほかの誰かを殺したの？

浩二 — 違う。つまり、俺は誰も殺してない……どうして本気で信じたんだよ？

由美 — もう何を信じたらいいか分からない……（袋を一つ開け、笑顔が凍りつく。）いや……何これ……ひどい……やっぱり誰か殺したの？

浩二 — 違う！ いや、殺したと言えは殺したんだけど……

由美 — これ、何なの？

浩二 — イノシシ……

由美 — イノシシ？ でも浩二、狩りなんてしないでしょ……それとも、それも私に隠してたの？

浩二 — 狩りなんかしないよ、安心して。でもイノシシの話は本当だった。

由美 — へえ……ぜひ聞かせてもらいたいわね……

浩二 — ちょうど健司と一緒にだった。ゴルフをしてたんだ。

由美 — 今度はゴルフ……まさか17番と18番ホールの間で、ゴルフボールを当ててイノシシを殺したとか言わないでしょうね？

浩二 — ゴルフの帰り、車で走ってた。山道でイノシシにぶつかったんだ。こっちも死にかけたよ。時速九十キロで二百キロもあるイノシシにぶつかったら、大きな四駆でもただじゃ済まない。

由美 — うちの車まで壊したの……？

浩二 — そこが一番の問題じゃないだろ？ それで道から外れて……健司は少し気を失った。

由美 — それで？

浩二 — まだ生きてたから、治療してもらおうと思って連れていくことにした。

由美 — 健司を？

浩二 — イノシシを！ トランクに入れて、動物病院まで運んだ。でも着いた時には、けがが原因で死んでた。

由美 — 誰が？

浩二 — イノシシ！

由美 — ああ……

浩二 — もうトランクに入ってたし……どうしたらいいか分からなかった。パテにしようって言い出したのは健司だ。

由美 — なるほど……いい考えね……でも、それなら……どうしてあんな話をでっち上げたの？

浩二 — イノシシを解体してる時に……健司が、君と寝たって告白した。

由美 — イノシシの死体を切り分けてたら、告白する気になったのね……で、何て言ったの？ 健司のほうは、自分が親友のベッドにいるって分かってたんでしょ。

浩二 — だから罪悪感があったんだ。良心の重荷を下ろしたかったらしい。

由美 — 良心？ 健司に？

浩二 — そうだな。むしろ俺を傷つけたかったんだと思う……自分も「過失による不倫」だったって逃げ道を作りながらな。君が言うみたいに。

由美 — それで？

浩二 — 最後には、最初から全部分かってやってたって認めた……たぶん君も分かってたんだろう、って。

由美 — あのクズ……私、本当に……

浩二 — 君は信じるよ。あいつは俺を傷つけたかっただけだ。言っただろ、昔から俺を妬んでた。実際、ずっと俺のことが嫌いだったんだ。で、つかみ合いになって……

由美 — それでシャツに血が……

浩二 — いや、それはイノシシの血。トランクに入れた時についた……

由美 — なるほど……

浩二 — そのあと仲直りした。別のシャツを貸してやって、あいつは帰った。

由美 — それから？

浩二 — 君が帰ってきた時、腹が立ってたのは君に対してだった。健司と寝たことを黙ってたから。裏切られた。だまされたって思った。

由美 — ごめんなさい。でも本当に、私は知らなかったの……

浩二 — その時、あのアイデアが浮かんだ。何となくな。かわいそうなイノシシを解体したら、妙な精神状態になってて。レシピは料理雑誌の『レタスクラブ』で見つけたんだけど……

由美 — 『レタスクラブ』で？

浩二 — 君を懲らしめたかった。「健司を殺した」って言って、どう反応するか見たかった。それから、どんどん話が膨らんで……

警察のサイレンが聞こえる。由美は、ゴミ袋からシャツがはみ出しているのに気づく。

由美 — 真紀だ……袋とシャツを見たのよ……警察を呼んだんだわ……

ドアを激しくたたく音。真紀が大きなナイフを手に現れる。

真紀 — 近づかないで、このイカれた二人……

由美 — 落ち着いて。全部説明するから。くだらない冗談なの……

浩二 — このゴミ袋に健司は入ってない。本当だ。

真紀 — 動かないで！ 動いたら撃つわよ！

浩二 — それ、ナイフだけど……

由美 — 一つ開けるから。自分の目で見て。

由美は袋の中身を真紀に見せる。

真紀 — 何なの、この気持ち悪いもの！

浩二 — イノシシだよ！ 見る、毛だらけだろ！

真紀 — 健司だって毛深かったわ！

由美 — ここまでじゃなかった……

真紀 — どうして由美が知ってるの？

声 — 警察です！

浩二 — 君が呼んだんだろ。説明するのも君のほうがいい。

由美 — 簡単じゃなさそうね……

真紀 — 分かった……

真紀が退場する。

浩二 — ごめん。俺がバカだった。裏切られた気がして……

由美 — 私のせいよ……最初から全部話すべきだった。でも、あなたが信じてくれない気がして……

浩二 — 二人ともバカだったな。

由美 — 隠し事って、じゅうたんの下に押し込んでも消えないのね……いつか必ず、ここに跳ね返ってくる……

浩二 — ああ。だから君も、真紀に言ったほうがいい。

由美 — 何を？

浩二 — 健司のことだよ。

由美 — どうせあの人、動くものなら何でも相手にしてたんでしょ。

浩二 — でも君は、真紀の親友だ……

真紀が戻ってくる。

真紀 — もう大丈夫。警察は帰った。ごめん、私どうかしてた。

由美 — 今夜はみんな少しおかしいのよ……満月のせいかも……

真紀 — 今日、満月だった？

由美 — 満月じゃなくても、そんな夜よ。

浩二 — 俺は外すよ。二人には話があるみたいだから……

浩二が退場する。

真紀 — 今の、どういう意味？

間。

由美 — 私も健司と寝たの。

真紀 — 何ですって？

由美 — 本当に……完全に、わざとじゃなかった。

真紀 — じゃあ、さっきの「過失による不倫」って……由美と健司のことだったの？

由美 — ずっと言おうと思ってた。でも、どう言えばいいか分からなくて。

真紀 — でも、どうしてそんなことが起こるの？

由美 — このクズの浩二が、健司の逢い引きのために、私たちのベッドを貸してたのよ…
…

真紀 — 分かった。信じる……もうそれ以上は聞きたくない。由美は私の親友でしょ？

由美 — ありがとう、真紀。

真紀 — 飲みすぎれば、誰だって間違いくらいするよ。

由美 — 私は完全にしらふだったけど。

真紀 — まあ、そこはどうでもいい。全部悪いのは健司よ。今すぐ目の前にいたら、本当に殺しかねない！

由美 — 人って、そう簡単には殺せないから安心して。でも弁護士が必要なら私がいる…
…離婚のほうの話よ。

真紀 — ありがとう……じゃあ、そろそろ帰る。二人も話すことがあるでしょ……今夜は母のところで寝る。鍵を忘れたって言うわ。

由美 — そうしなさい……明日になれば少し見えてくる。私たちみんな、きっと……

真紀が帰る。浩二が戻ってくる。二人はソファに座り、しばらく黙っている。

浩二 — 本当に、わざとじゃなかった？

由美 — じゃあ……故意じゃなかった、ってことで。

浩二 — 分かった。そういうことにしておく。

二人は抱き合う。

由美 — でも、あれ以来ちょっと性欲が戻ったのは本当……

浩二 — ああ、気づいてた。どうしたのかと思ってたよ。

由美 — こういう刺激、たまには必要かもね。

浩二 — 何を……夫婦のベッドで、相手が誰か分からないまま寝ること？

由美 — ほかに、愛人との場所に困ってる友達に、うちを貸してるの？

浩二 — 俺が考えてたのは逆だよ。君にだって、夫に隠れて浮気してて場所を探してる女友達くらいいるだろ。君は一回先にやったんだから……次は俺の番だ。

由美 — 残念。私の女友達はみんな旦那一筋なの。

浩二 — とても信じられないな……その話はまた今度。でも正直、俺もちょっと興奮してきた……

音楽。二人はキスをする。

暗転。

エピローグ

リビングの隅に三つのスーツケースが置かれている。浩二が外から帰ってきて、コートを脱ぐ。

浩二 — 由美！ いる？

由美が現れる。

由美 — どうだった？

浩二 — すごく気に入ってくれた。秋から上演するって。

由美 — 本当？ すごいじゃない！

浩二 — タイトルも最高だって。

由美 — 『ちょっとした殺人、後腐れなし』……『電子レンジ』よりずっといいものね…
…

浩二 — 実体験に基づいてるからな……

由美 — ほとんどね……

二人はキスをする。

浩二 — 結局、終わりよければすべてよしだ。

由美 — 私はずっとあなたを信じてた……信じられないような話を聞かされてる時でさえね。

浩二 — 結局、あの一件で二人の距離も近くなった。もう二度と君に嘘はつかない。

由美 — 私も、もう何も隠さない。

浩二の目がスーツケースに止まる。

浩二（不安そうに） — このスーツケース、何？ もう俺を捨てるの？ 今あんなこと言ったばかりなのに……

由美 — 真紀の荷物よ。今夜ここに泊めてほしいって。健司とうまくいかなかったみたい……行くところがないんだって。

浩二 — またかよ……いつまでたっても追い出せないな……

由美 — それくらいしてあげないと……

浩二 — まあいい。でも一晩だけだぞ……

玄関のチャイムが鳴る。

由美 — 真紀だと思う……

浩二 — 分かった。シャンパンを取ってくる。

由美 — 真紀の離婚祝い？

浩二 — 俺の芝居の上演決定祝いだよ！ 仕方ない、真紀も一緒に飲めばいい。

浩二が退場する。由美が玄関へ行き、真紀と一緒に戻ってくる。

由美 — 顔色悪いわよ。けんかしたの？

真紀 — ねえ、由美……私、まずいことしちゃったかも……

由美 — 怖いこと言わないで、真紀……どんな「まずいこと」？

真紀 — 私……健司を殺したかもしれない。

由美 — その手は一度やったでしょ。二度目はだまされない！

真紀 — 二人でちょっと話し合ったの。すぐに激しくなって、私、「今すぐ家を出て」って言った。

由美 — それで？

真紀 — それで……健司は荷物をまとめに行った。そのあと、ちょっとだけ收拾がつかなくな……

由美 — ちょっとだけ？

真紀 — 私、鶏を切り分けてたの……電動ナイフを持ってて、それで……ちょっとカッとなった。

由美 — でも健司はどこ？ 病院？

真紀 — 残念だけど、救急車を呼ぶにはもう遅かった。脅すだけのつもりだったの。あいつが挑発するみたいに近づいてきて、反射的に手が動いて……頸動脈を切っちゃった。

由美 — うそ……悪夢が続いてる。でも、健司はどこ？

真紀はスーツケースに視線を向ける。

真紀 — その……スーツケースの中……

由美 — うそでしょ？

真紀 — 由美、相談に乗ってほしいの。

由美 — 弁護士として？ 期待しすぎないで、真紀。「法廷の殺し屋」って呼ばれてても……これを家庭内事故で通すのは無理よ……

真紀 — そうじゃなくて……強いアルカリ液に浸けてから、浴槽の排水口から処理するほうの相談……

由美 — 浩二と相談しないと……

浩二が上機嫌で、シャンパンのボトルを掲げながら戻ってくる。

浩二 — シャンパン！

二人は呆然と浩二を見る。

暗転。

著者について

ジャン＝ピエール・マルティネス

1955 年、フランスのオーヴェル＝シュル＝オワーズ生まれ。

若い頃にはいくつかのロックバンドでドラマーとして活動した後、広告分野の記号論研究者として仕事を始める。その後、テレビドラマの脚本家として活動し、やがて演劇の世界へと進み、戯曲を書くようになる。

これまでに数多くのテレビ脚本と 100 本を超える戯曲を執筆。その作品はフランスをはじめ世界各国で上演され、多くの言語に翻訳されている。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品は、現代社会、人間関係、権力、偶然、アイデンティティといったテーマを、ユーモア、風刺、不条理、時にはブラックユーモアを交えながら描いている。

戯曲の多くは、著者の公式サイトで無料で読むことができ、PDF でダウンロードすることもできる。

ジャン＝ピエール・マルティネスの日本語版戯曲：

jeanpierremartinez.net — 日本語版戯曲

著作権および上演について

著者：ジャン＝ピエール・マルティネス

翻訳・翻案：著者

本作品は著作権によって保護されています。

この戯曲のテキストは、個人的な読書を目的として無料で読むことができ、ダウンロードすることもできます。

ただし、プロ・アマチュアを問わず、公の場で上演する場合には、事前に著者の許可を得る必要があります。

上演には、所定の著作権使用料が発生する場合があります。

著者の事前の許可なく、本作品の全部または一部を上演、翻案、複製、公開することはできません。

ジャン＝ピエール・マルティネスの作品の上演を希望される場合は、著者本人に直接お問い合わせください。

お問い合わせ：

<https://jeanpierremartinez.net/en/contact-2/>

ジャン＝ピエール・マルティネスの戯曲：

jeanpierremartinez.net — 日本語版戯曲

© La Comédiathèque